

# 住まいの体験ものがたり

神田 順 ◎東京大学名誉教授／日本大学客員教授

生まれてこの方、時には日本を飛び出し、東西南北さまざまな場所に住んだ。その住まい遍歴を記すこととする。

生まれは岐阜県の北方町。家具屋に嫁いだ伯母の、木造平屋の借家である。戦地から帰った父と伯父2人に、同じ年の従姉弟が3人生まれた。向かいには祖父と伯父家族が住んでいた。庭には柿畠があって、今も地割はそれほど変わっていないが、実際の記憶はほとんどない。

4歳のとき妹が生まれ、父の会社の近く、東京の馬込に、戦後すぐの金融公庫制度を使って父の建てた、片流れ屋根の木造2階建に4人家族で住んだ。当時の庭木、カシ、モチ、サクラ、カキは今も健在である。中学に上がるころから2階の屋根裏を自由に作成して使った。8畳間の縁側を1間の廊下に増築したり、さらに高校生のときは、その上に2階を増築して、妹の部屋ができたりした。

就職して1年間は生まれて初めて親元を離れて、大阪の千里山で寮生活を送った。2人部屋であるが、壁でプライバシーは保たれている。400人の新入社員の共同生活は、食堂や風呂場も広く、気持ちよかったです。最上階で洗濯をし、屋上に干した。残念ながら数年で新入社員数も減り、取り壊されて、今はふつうのマンションになっている。

東京勤めになり、結婚して松戸市北小金のSRC造の7階建新築マンションの3階に住んだ。設計変更もお願いして、玄関の床をタイル張りに、和室の壁紙は塗り壁に、ベランダに煉瓦を積んで花壇をつくったり、3DKを開放感のある1LDKにした。戸建に比べて冬暖かく、夏涼しいことを痛感した。

英国エдинバラ留学の機会を得て、3年間は、郊外の漁村Port Setonの靴屋の2階の家具付き住宅



を借りた。1800年代の赤いドアの入口の建物だった。セントラルヒーティングで、快適であった。賃貸契約は弁護士を介した。ただ、ガスがプロパンで、港の雑貨屋で購入する必要があり、重いボンベを転がして、最後は階段を上がってという面倒はあった。港とはいっても、大きなフォース川の港である。排水管は古いもので、川に垂れ流し。子どもの紙おむつをトイレに流したせいで詰まらせたり、屋根裏の水槽があふれたり。設備系では、いろいろな問題も体験した。

北小金に戻ってしばらく住んだが、ちょうど10年目の大規模修繕の時期となり、管理組合の理事長を務めた。当時の修繕積立金は微々たるもので、全34戸の了解のとりまとめは、銀行の借り入れの段取りなど、それなりに苦労した。ただ、外壁塗装やエントランスまわりのポーチのグレードアップをすることができたのは、よかった。今も健在である。

父が他界したことから、また子ども3人でマンションも手狭になったことから、馬込に戻り、母と同居した。生前の父と計画していた台所と風呂場の改築を、丸テーブルのための円形平面の食堂を増築する形で実行した。地下には防空壕もあり、それをまたいだべた基礎にして、補強コンクリートブロック造の平屋。不整形の屋根スラブはRC造でアスファルト防水にモルタル仕上げ、屋上でのBBQも可能だ。

しばらくして、1年間、家族5人で米国ボルチモアの団地アパートに住んだ。これは、町はずれのけっこう大きな団地で、日本人も何家族か居た。コンクリートの低層壁式集合住宅で、駐車場も、庭もたっぷりの気持ちよいところ。初夏には立木に蛍が集まり、クリスマスツリーのようであった。プールやキャンプサイトもあった。1か月旅行をしたときは、



①金石市唐丹町小白浜の伝統的木構法による建築  
「潮見第」(2017年竣工)

エアコンはつけたままにといわれたような気もするが、とにかく、電気代の安いアメリカであった。

ボルチモアの住まいを経験して、馬込を建て替えることにした。6人家族ということもあり、200m<sup>2</sup>超で、地下室に、屋上もあるRC+木造の混構造の住宅である。9年前に建てた台所風呂場食堂はそのまま残した。その家から、子どもたちは独立し、母も3年ほど介護したが、今は施設に入り、夫婦2人で住んでいる。

その間、6年ほどは、流山に小さな家を設計して単身で住んだ。大学キャンパスが柏に移り、通うのに少々遠いということで、徒歩圏に土地を探した。庭も広くとれて気持ちよく住んだ。つくばエクスプレスができると、周辺に小さな敷地の住宅が増え、森が少しづつ削られている。

そして、ガーデン・シティで有名なニュージーランドのクライストチャーチに6か月、大学の宿舎に住んだ。古いスレート屋根の平屋で、気候は東京と変わらないが、冬の電気代がすごくびっくりしたことを覚えている。

6年ほど前には、東日本大震災の被災地、釜石の唐丹町小白浜に、復興まちづくり目的の会社を設立し、4年前に事務所兼住宅「潮見第」を建てた(写①)。ときどき滞在している。現地の山林のスギを伐採、隣町で製材し、山形県鶴岡の棟梁の手による伝統工法の木造2階建である。今も戸を開けたとき、スギの香りがして、床板の柔らかい感触も心地よい。

自分としては、いつもそれなりに気持ちよく住めているが、わが国の住まいや住宅を思うと、気になることが少なくない。大学で建築を学び始めて50



②ロンドン、ケンジントンのヴィクトリアンテラスハウス

年になるが、社会制度も含めて住のあり方が、もう少し何とかならないか。

エдинバラ郊外とボルチモア、クライストチャーチ、都市の規模も密度も異なるが、そして地域によっては再開発が進んでいたり、高層ビルもないわけではないが、道路と公園とまちなみは、100年経っても変わらない落ち着きがある。

戦災を受けた東京でも、もちろん明治期や関東大震災直後も、田園都市や緑地を配した都市計画されたはずだ。しかし、現実は無計画に畠地や森が住宅地に代わり、郊外には団地ができた。そして、世代がまた変わる近年、オフィスビルの高層化を追うようにして、ショッピングモールやタワーマンションの林立するまちになった。住宅地の敷地はさらに小割にされて、庭なし木造3階建の住宅が軒を連ね、あるいは、箱型のワンルームアパートが建つ。緑地はさらに削られていく。都内のほとんどの住宅地が、今はそんな状況で、戦後すぐの田園都市の言葉が浮かぶまちから、どんどん遠ざかっている。

ロンドン市内の住宅地に多い、ヴィクトリアンテラスハウスと呼ばれる低層集合住宅(写②)は、150年経っても健在で、まちの景観をつくっている。少し郊外では、緑豊かな庭が広がっている。人口と土地面積の条件を考えても、イギリスはまだまだお手本になる。家の性能としては快適度は確実に高くなっているが、それで、住宅やまちが、気持ちよい空間になるかというと、疑問である。これから良質な住まいのまちをつくるためには、社会を変える抜本的な制度設計が必要である。

(かんだ じゅん)